

## 巻頭言

## 航空環境研究センターの貢献\*

難波 精一郎\*\*

航空環境研究センター設置50周年誠にとおめでとうございます。

この50年の間に研究センターは多くの貢献がされてきましたが、その道筋は決して平坦なものだけではありませんでした。私が機構および研究センターの過去からの経緯等を承知していることで執筆をご依頼頂きましたが、私が承知しているのはごく限られた範囲です。それもごく浅い理解です。それでも2005年度、当時の(財)空港環境整備協会の理事に就任した丁度その年に、内閣官房行政改革推進事務局より公益法人制度規制改革のための所要の法律案を次期通常国会に提出予定との通知がまいりました。要するに今後新たに供用する空港駐車場は公募制を導入すること、既存の22空港についても、今後の運営のあり方について、民間開放の検討をすべきである、との趣旨でした。

協会は駐車場からの収益によって「空港周辺環境の対策」を行うと共に「航空環境研究センター」の運営に当たり高い実績をあげてきました。この収益がなくなれば環境対策も研究センターの活動も不可能となります。歴代会長、理事長および事務局の大変なご努力で、2012年高橋会長の時に従来の公益法人から一般財団法人に組織替えとなり現在に至っております。この激動の時代に当時の山田一郎所長のもと、研究センターは活発な活動を維持し、現在の篠原所長の時代には活動を維持すると共に、この新型コロナ禍の下、種々の

困難な事態がある中で、オンラインで「研究発表会」を実施するなどさらに活動の幅を上げられました。このオンライン研究会には数百人の参加者があり、私も聴講させて頂きましたがよく整備され準備の行き届いた会場で活発な討議もあり参加して大きな満足感をうることができました。コロナが去ってもこのオンラインの発表会は継続して頂きたいと思いました。

私のもう一つの協会への関与は、1997年度から航空機騒音委員会の委員に加えて頂いたことです。委員長は東大名誉教授の五十嵐寿一先生、センターの所長は時田保夫先生の時代でした。旧知の山田一郎小林理学研究所所長(当時)とご一緒できて心強く感じました。五十嵐委員長より本来のWECPNL(ICAO版)でなく日本版WECPNLjを使用したための問題点と、外国のように $L_{eq}$ ベースを考えていく場合の対応を考慮しなければならないとのご指摘があり将来を見据えたご発言に感銘を受けました。この問題は後に成田の逆転現象の原因となり環境基準の見直しにつながる重要なお指摘だったと五十嵐先生の先見性に今更のごとく感心する次第です。

その後、アクティブノイズコントロールによる騒音低減技術の問題など議題となりましたが航空機を対象にすることには委員の間で疑問がありました。一方、大阪空港周辺のWECPNLと $L_{Aeq}$ の比較を通じてエネルギーベースとの対応関係についてデータの蓄積が行われました。またINM

\* Contributions of Aviation Environment Research Center

\*\* 大阪大学名誉教授

モデルなど予測モデルについて検討が行われるなど重要な話題が五十嵐委員長のもとで進められました。またそれに続いて航空機騒音の評価手法の比較や基礎データ検討の問題も加わるようになりました。さらに2002年度には離陸時の騒音の後方指向性に関する話題など今日につながるテーマで審議されています。また単なる予測ではなく精緻モデルとして航空機騒音に関するコンピュータ・シミュレーションなど当時のコンピュータの性能の限界を考慮しながら検討が進められました。またその年度には当時の東大生産技術研究所教授の橘先生が委員として参加され心強く感じました。次年度の2003年度には五十嵐先生がアドバイザーとしてご指導いただくという条件で私が委員長に就任させて頂きました。その後、 $L_{AE}$ ベースの基礎データの積み重ね、精緻モデルや予測モデルの性能向上などの検討が行われました。2005年度の第1回委員会は9月に、第2回委員会は年を越した1月20日に開催されました。この委員会の開催された年の1月2日に五十嵐先生が逝去され、委員会の冒頭、委員全員で先生のご冥福をお祈りして黙祷を捧げました。

その後のことは、私に与えられた過去の域を離れると思うのでここで筆を置きたいと思います。ただ2007年(平成19年)に「航空機騒音に係る環境基準について」の一部改正が行われ、航空機騒音の評価量は等価騒音レベルを基本とする時間帯補正等価騒音レベル $L_{den}$ を採用することになりました。これにより、最新の騒音測定技術の活用、国際動向への整合、地上騒音等の寄与を考慮した総暴露量の評価が可能となりました。ただ、騒音測定の実務上、熟練を要する種々の課題に直面することになったと想像します。本研究センターのこれまでの $L_{AE}$ ベースを基礎とする研究の積み重ねが今後の騒音測定、評価にますます貢献することと期待しています。

本研究センターは守田栄先生はじめ歴代の所長、所員に人を得て、成果を挙げ続けられました。これまでと同様、いやそれ以上に発展されることと存じます。

50周年を迎えますますのご飛躍を期待しています。